

観察者はどう判断するのか ——攻撃行動の認知に影響する要因の検討——

神 田 信 彦*

How do the observers judge it?: The examination of factors that influence cognition of aggressive behaviour

Kanda Nobuhiko

問 題

凶悪な暴力事件や、有名タレントによる暴力事件が起こると、加害者がどうしてそのようなことをしてしまったのだろうか和私たちは考える。何故なら、攻撃行動は他者の心身にダメージを与える極めて望ましくない反社会的行動であり、われわれの社会では攻撃行動をとることは否定的に扱われ、法律によっても規制されその行使は処罰を受けることもしばしば生じるからである。したがって他者にたいして攻撃的に関わることは多くの人が避けていることである。そのためある人が攻撃行動を起こした場合、それを知った他者はその攻撃行動はどうして生じたのかその原因を知ろうとしたり、得られる情報からどの程度攻撃の実行者に責任があるかを判断しようとする。

観察者としての人是一般的に他者の行為の原因をその行為者の内的な要因に求める傾向があり、Ross (1977) はこれを基本的帰属錯誤と呼んでいる。攻撃行動に関しても観察者は同様に基本的帰属錯誤を行うと考えられる。つまり、観察者がある人の攻撃行動を目撃したとするとその実行者が攻撃的な特性を持っているから攻撃したのだと判断する傾向が強いと予想される。しかし Reeder et al. (2001) は異なる種類の促進的状況要因が存在する場合、観察者は同じ行為を観察してもそれぞれ異なる動機によって行われたと判断することを明らかにしている。これを攻撃行動に適用すれば、攻撃行動が生じた状況の条件やその攻撃行動の原因次第では、その行使はやむを得なかった。つまりその人がもともと攻撃的な人物であったからそうしたのではなく、他の誰かがそれと同じ状況に置かれたとしたら同じような攻撃行動をとったであろうと判断され、その行為が正当化されることも少なくなく、時にはそれが賞賛されることもあると言える。例えば人前でひどく恥をかかされたり自尊心を傷つけられた時に、怒りを感じ攻撃的行動で報復する場合は、観察者からは、自尊心を回復するための自己防衛的な攻撃行動としてとらえられ、金品を強奪するために暴力をふるう場合に較べ多少の正当性があると判断されるであろう。前者は侮辱

* かんた のぶひこ 文教大学人間科学部

や攻撃などの挑発に対する反応として生ずるので反応的攻撃と呼ばれ、後者は挑発なしに他の動機によって引きおこされるので積極的攻撃と呼ばれる（例えばCrick & Dodge, 1996）。それぞれ従来から使用されている感情的攻撃と道具的攻撃におおむね対応するものである。

積極的攻撃は利己的な願望の実現のために道具的な動機に基づき行われるので、報復や自己防衛という動機に基づいて行われる反応的攻撃に比較して、割引原理（Kelley, 1973）が働かず攻撃を行った人物が不道徳であると観察者から判断される（Reeder et al., 2002）。一方、反応的攻撃を行った人はそれ相当の理由があったと解釈され、その人の特性としての攻撃傾向が割り引かれると考えられる。本研究では反応的攻撃を取りあげ、挑発の有無が攻撃に関する観察者の判断に与える影響を検討した。

また、攻撃の対象となる人物も攻撃行動に対する観察者の判断に影響を与えると考えられる。攻撃対象となる人物が知人であるか、見知らぬ他者であるかという状況はそれだけで観察者の判断に影響を与えるのであろうか、攻撃者の攻撃が偶然であると判断するのであろうかそれとも攻撃者の攻撃性の高さを示すことになるのだろうか。あるいは他の要因の関与によって影響を受けるのであろうか。

さらに、攻撃行動は相手の身体だけでなく心にもダメージを与えるものである。これによれば身体攻撃に加えて言葉によって相手を傷つけることも攻撃行動として位置づけられる。言語攻撃行動は身体攻撃行動に較べ社会的あるいは法律的許容度が高く、身体攻撃行動に較べると比較的多く見られる。したがって身体攻撃は言語攻撃に較べその人の攻撃性に帰属される可能性が強いと考えられる。

本研究は上に述べた反応的攻撃について「挑発」「攻撃対象」及び攻撃の「様態」の3要因を取りあげ、以下のようにそれぞれ2水準として取りあげ、「仲間からの挑発あり－仲間からの挑発なし」、「言語攻撃－身体攻撃」及び攻撃対象「仲間－見知らぬ他者」としTable 1のような8条件を設定した。

Table 1 3要因の関係

挑発の有無		仲間からの挑発あり		仲間からの挑発なし	
攻撃の様態		言語攻撃	身体攻撃	言語攻撃	身体攻撃
攻撃	仲間	報復攻撃	報復攻撃	攻撃	攻撃
対象	他者	置き換え攻撃	置き換え攻撃	攻撃	攻撃

挑発は「仲間からの挑発」だけとし「見知らぬ他者からの挑発」は設定しなかった。これは表中にある報復攻撃と置き換え攻撃とについて観察者の判断を検討することを目的の1つとしたからである。仲間からの挑発なし条件は、攻撃対象が仲間である条件では「仲間から明確な挑発はない」ということ、ちょっとした仲間の言葉に反応したことを示唆する条件設定とし、他者が攻撃対象である条件では「仲間からの明確な挑発はない」が「他者とのささいな小競り合い」を発端としてそれぞれ攻撃行動が現れる条件設定とした。また「仲間からの挑発あり」で攻撃対象が「見知らぬ他者」条件は別の場面で「仲間からの挑発」を受けその後「見知らぬ他者」と「ささいな小競り合い」から攻撃行動に至るとの設定とした。

これらに関して、攻撃行動を行った人物に対する観察者による攻撃性の判断、攻撃行動に対する共感の程度、攻撃行動に対する許容度を検討した。攻撃行動の観察者は以下のような判断を行うと考えられる。

- (1) 攻撃行動に対する共感と許容度は、挑発あり条件がなし条件に比べ高くなるであろう。
- (2) 言語攻撃行動は身体攻撃行動に比較し高い共感と許容度を得るであろう。
- (3) 見知らぬ他者に対する攻撃行動は、仲間に対する攻撃行動に比べ共感も許容度も低くなるであろう。
- (4) 共感について、挑発なし条件では攻撃対象条件による差は見られないが挑発あり条件では、攻撃対象が仲間条件—直接報復—は、見知らぬ他者条件—置き換え攻撃—に比べより共感をえるであろう（挑発×攻撃対象の交互作用）。
- (5) 許容度も（4）と同様の結果（挑発×攻撃対象の交互作用）が予測される。

攻撃行動の実行者がもともと攻撃性の強い人物であるかの判断は、挑発なしが有りに比較し、身体攻撃が言語攻撃に比較し、さらに対象が他者である場合が仲間である場合に比較しより攻撃的であると判断されると考えられる。さらに挑発なし—身体攻撃—他者条件が他の条件に比べ最も高いことが予想される。つまりここでも3要因の交互作用があると考えられる。

方 法

被験者 埼玉県内W大学の学生248名（男子74名、女子174名；平均年齢19.25歳、SD=1.15）。
刺激および手続き 場面想定法を用い男子学生のA君が攻撃行動に出してしまう場面を文章で提示した。具体的には「挑発」「様態」及び「攻撃対象」の3要因についてそれぞれ2水準（「仲間からの挑発の有無」、「言語攻撃あるいは身体攻撃」、「仲間あるいは見知らぬ他者」）とし8つの場面を作成し、各被験者にはそのうちの一つを提示した。なお、仲間からの挑発あり—身体攻撃—仲間の場面は「大学生のA君は仲間との集まりで、思いがけずみんなからひどく馬鹿にされてしまいました。A君は思わずカッと成って一番馬鹿にしたB君に殴りかかってしまいました。」というものである。また、攻撃対象が「見知らぬ他者」条件の「仲間からの挑発あり」の場面設定について言語攻撃条件の例を示すと、「大学生のA君は仲間との集まりで、思いがけずみんなからひどく馬鹿にされてしまいました。その帰りの電車の中で他の乗客と足を踏んだ踏まないで激しい口論となってしまいました。」であった。

上記刺激文に続き以下の質問を行った。(1) A君の気持ちへの共感の程度（回答は「わからない」、「少しわかる」、「わかる」、「よくわかる」及び「とてもよくわかる」の5件法）、(2) A君の行為に対する許容度（回答は「許せない」、「少し許せる」、「許せる」、「かなり許せる」及び「大いに許せる」の5件法）(3) A君は攻撃的な人物であると思う程度（回答は「攻撃的でない」、「やや攻撃的」、「攻撃的」、「かなり攻撃的」及び「非常に攻撃的」の5件法）であった。いずれも得点化は1～5点とし、その得点が高いほどそれぞれの判断が強いことを示すようにした。

実施方法 心理学系科目の授業終了時に、予めランダムにして用意された刺激を配布しその場で回答を求め回収した。なお回答の所用時間は約10分であった。

実施時期 2002年1月。

結 果

全体の傾向 各測度の要因ごとの平均値と標準偏差はTable 2の通りである。共感の程度及び許容度はいずれも低い数値となっており攻撃行動自体への共感の程度平均値は回答の選択肢「少しわかる」と「わかる」の間に位置する値であり、許容度の平均値は「許せない」と「少し許せる」の間に位置している。また元々の攻撃性の判断の平均値はの選択肢「攻撃的」と「やや攻撃的」の値となっている。

次に挑発の有無、攻撃行動の様態及び攻撃多少を独立変数とし、各項目への反応を従属変数とする3要因8水準 (Table 3) の分散分析を行った。

Table 2 各測度の平均値 (標準偏差)

	攻撃の様態		挑 発		攻撃対象		合 計 n=248
	言語攻撃 n=130	身体攻撃 n=118	あり n=125	なし n=123	仲間 n=125	見知らぬら他者 n=123	
共感	2.31 (1.23)	2.12 (1.18)	2.92 (1.14)	1.51 (.71)	2.31 (1.33)	2.13 (1.00)	2.28 (1.18)
許容度	2.25 (.94)	1.70 (.75)	2.26 (.99)	1.72 (.70)	2.18 (.92)	1.80 (.85)	1.99 (.90)
偶然性の判断	2.51 (1.07)	2.05 (.99)	2.25 (.98)	2.33 (1.12)	2.09 (.88)	2.50 (1.17)	2.29 (1.05)
再行使の可能性	2.66 (1.10)	2.63 (1.11)	2.53 (1.01)	2.76 (1.18)	2.60 (1.01)	2.69 (1.20)	2.65 (1.10)
元々の攻撃性の判断	2.23 (1.05)	2.23 (1.02)	1.96 (.95)	2.50 (1.05)	2.14 (.94)	2.33 (1.13)	2.23 (1.04)

Table 3 各変数の3要因の平均値 (標準偏差)

攻撃の対象 態 様	仲 間				見知らぬ他者			
	言語的攻撃		身体的攻撃		言語的攻撃		身体的攻撃	
	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし
挑 発								
共感の程度	3.42 (.97)	1.41 (.76)	3.11 (1.28)	1.23 (.43)	2.66 (1.43)	1.70 (.85)	2.45 (.97)	1.71 (.60)
許容度	2.89 (.92)	1.84 (.63)	2.41 (.75)	1.47 (.57)	2.10 (1.05)	2.09 (.81)	1.61 (.92)	1.39 (.50)
偶然性の判断	2.39 (.84)	2.13 (.98)	2.07 (.87)	1.70 (.70)	2.14 (.99)	3.33 (1.02)	2.33 (1.20)	2.07 (.50)
再表出可能性	2.86 (1.13)	2.66 (1.10)	2.37 (.79)	2.43 (.90)	2.34 (.90)	2.73 (1.23)	2.45 (1.09)	3.29 (1.35)
同様自体での欲求	2.56 (1.08)	2.28 (1.17)	2.48 (1.01)	1.77 (.77)	1.83 (1.07)	1.52 (.91)	2.45 (.94)	1.68 (.77)
同様の結果となる可能性	2.19 (.58)	1.90 (.47)	2.30 (.99)	1.90 (.61)	2.07 (.69)	1.62 (.56)	1.76 (.87)	1.39 (.50)
攻撃性の帰属の程度	1.86 (.68)	2.72 (1.09)	1.81 (.79)	2.13 (.90)	1.82 (1.17)	2.52 (1.00)	2.30 (1.13)	2.64 (1.16)

() 内は標準偏差

共感の程度 まず、「A君のってしまった行動気持ちがわかるか (以下では共感)」をみると挑発の主効果 ($F(1, 240) = 145.45, p < .001$) と、攻撃対象×挑発の交互作用 ($F(1, 240) = 22.35, p < .001$) が有意となった。交互作用に関して下位検定 ($\alpha = .5$) を行ったところ、「挑発なし-仲間」と「挑発なし-他者」以外のすべての組み合わせにおいて有意差を得た (Figure 1)。これはA君が挑発を経験した場合の攻撃行動は (言語攻撃であっても身体攻撃であっても)、挑発を経験していない場合の攻撃行動に較べ被験者が高い共感を示し、挑発を経験していない場合は場所によって共感の程度に差はないが、挑発がある場合は仲間への攻撃行動が見知らぬ他者への攻撃行動に較べ被験者がより強く共感したことを意味している。なお挑発あり条件で、攻撃対象が仲間の場合は攻撃が直接報復であり、見知らぬ他者の場合は置き換え攻撃であった。置き換え攻撃は挑発なし条件に較べ共感を得ているが直接報復に較べ共感は低くなっている。

許容度 「A君の攻撃行動についての許容度」に関しては、挑発 ($F(1, 240) = 31.83, p < .001$)、様態 ($F(1, 240) = 27.46, p < .001$) 及び場所 ($F(1, 240) = 13.00, p < .001$) の主効果がいずれも有意となった。また、挑発×攻撃対象の交互作用 ($F(1, 240) = 20.16, p < .001$) が有意となった。様態の主効果については、言語攻撃は身体攻撃に較べ許容されたことを意味している。挑発×攻撃対象の交互作用は、下位検定 ($\alpha = .05$) の結果、「挑発あり-仲間」が他の3つの組み合わせと有意差を示した。これは言語攻撃か身体攻撃かとは独立に「挑発あり-仲間」での攻撃行動は他の場合の攻撃行動に較べ許容される程度が高かったことを示している (Figure 2)。

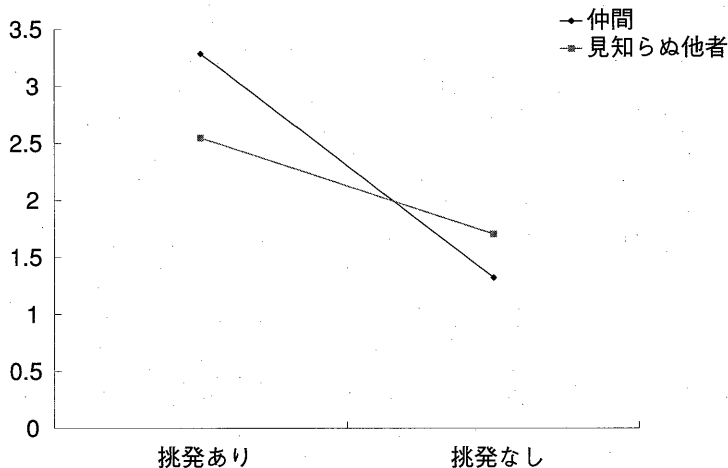


Figure 1 攻撃行動に対する共感の交互作用 (挑発×攻撃対象)

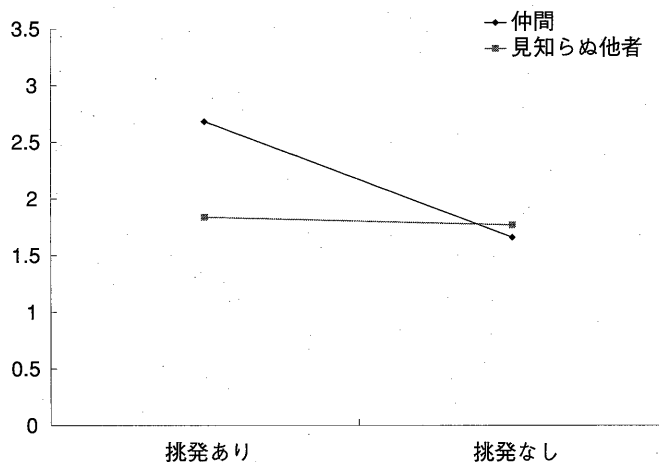


Figure 2 攻撃行動に対する許容度の交互作用 (挑発×攻撃対象)

攻撃性の判断 「A君はもともと攻撃的な人間であるかに関する判断」に関しては、挑発の有意な主効果 ($F(1, 240) = 18.97, p < .001$) 及び、様態×攻撃対象の有意な交互作用 ($F(1, 240), p < .05$) が得られた。挑発の主効果については、挑発あり条件は挑発なし条件に較べA君はもと

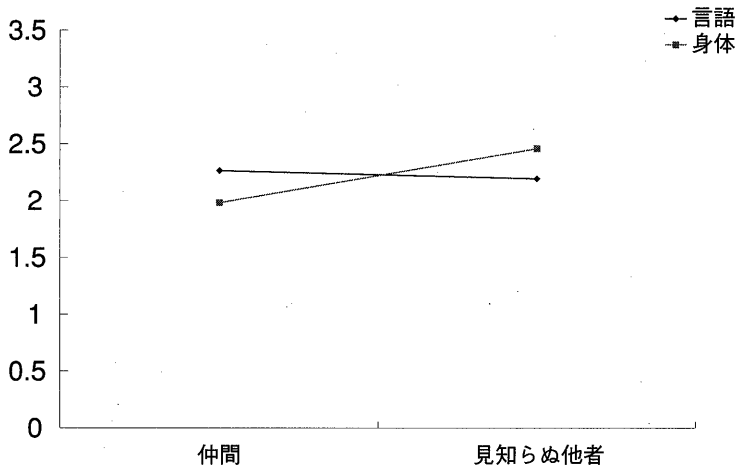


Figure 3 A君の攻撃性に関する判断の交互作用 (様態×攻撃対象)

もと攻撃的な人物であると判断されたことを示している。様態×攻撃対象の交互作用について下位検定を行ったところ条件間での有意差は見られなかったが、Figure 3で示されるように言語攻撃の場合、被験者は攻撃対象が仲間であったも見知らぬ他者であっても差はないが、身体攻撃の場合は、攻撃対象が仲間で低く、見知らぬ他者では高くなり、さらに言語攻撃と公差する関係を示している。

考 察

本研究は攻撃行動を観察した無関係の他者が、攻撃行動の実行者にたいして抱く共感、攻撃行動への許容度、及び攻撃者の元々の攻撃性の判断に影響を与える状況要因—挑発の有無、言語攻撃・身体攻撃の別及び公共性の高低について検討を行った。

共感の程度は、挑発の主効果と挑発×攻撃の直接性の交互作用が見られた。挑発なしに較べ挑発ありはより高い共感を得た。挑発があることは攻撃行動の動機として受け入れられやすいことを示している。交互作用に関しては挑発なしでは攻撃対象が仲間であっても、見知らぬ他者であっても変わらず低い水準であったが、挑発ありでは両対象とも挑発なしに較べ許容されていた。さらに攻撃対象が仲間である場合は見知らぬ他者に較べ許容されていた。この差は前者が直接報復であること後者が置き換え攻撃であることが反映していると考えられる。挑発は攻撃行動と関係づけられるが、挑発者とは関係のない人に対する攻撃行動は動機としての挑発が受け入れにくくなるということであろう。

許容度は、3要因それぞれの主効果が有意となり、また挑発×攻撃対象の交互作用が見られた。交互作用を見ると、挑発なし条件では、いずれの対象であっても許容度は同様に低く、さらに挑発あり条件であっても対象が見知らぬ他者である置き換え攻撃の場合は、挑発なし条件と同程度に低く、直接報復である仲間への攻撃だけが許容度が高かった。既に述べたとおり、共感の程度では、置き換え攻撃は挑発なし条件に比較し高い共感を得ていたが、許容度に関してはそうではなかった。これは攻撃の動機の正当性を持たないと判断されたことを意味していると考えられる。

攻撃の様態は他の要因とは独立に許容度の違いを持った。身体攻撃に較べ言語攻撃の許容度が高かった。共感の程度に置いては有意差は見られなかったが、許容度、逆に言えば攻撃行動としての問題性や責任性の判断に対して強い影響力があると考えられる。この結果は攻撃行動の責任を判断するにあたっては、まず暴力の様態が基本にあってその後他の諸要因が考慮されて行為者の責任が割引されたり、割り増しされるということを推測させる。

攻撃の実行者が攻撃性の強い人物であるかの判断の結果は、挑発の主効果と様態×攻撃対象の交互作用を得た。挑発の主効果に関しては挑発という怒りやさらには攻撃行動を喚起する外的刺激が存在しない状況、つまり明確な動機不在で攻撃行動が現れる事態では、攻撃行動の実行者の内部に攻撃の原因を求めることになり、一般的にはその人物が攻撃性の高い人物であると判断されることを示していると考えられる。様態×攻撃対象の交互作用は条件間の有意差は得られなかったが、言語攻撃が仲間であっても見知らぬ他者であって差が見られなかったのに対して、身体攻撃は攻撃対象が仲間では言語攻撃よりも実行者の攻撃性が低く見積もられ、見知らぬ人では言語的暴力よりも高く見積もられたことを示し両要因が交差する関係であった。この交互作用は有意ではあったがF値もさほど高くなく、条件間での有意差も存在しなかったので、今後再検討の上、効果を確認する必要がある。

以上をまとめてみると、共感に対して仮説通り要因の有意な主効果を持ったのは挑発だけであった。攻撃行動の背景に挑発という怒りなどの否定的感情を生起させる外的刺激の存在だけで共感が生起するのであろう。また許容度については、仮説通り3要因それぞれに有意な主効果が見られた。許容度は行為の責任や善悪の判断と結びつくものと考えられるが、共感とは異なり多くの情報が必要であるのだろう。さらに攻撃の実行者の攻撃性の判断については、予測とは異なり、挑発だけが有意な主効果を示した。本研究の各条件で呈示された情報には、行為者の過去の類似場面での行動などの手がかりとなる情報が不在であった。このような場合、明確な挑発なしに攻撃行動が現れることはその人物の攻撃性を予測される要因となると考えられる。さらに共感と許容度とに見られた挑発×攻撃対象の交互作用は観察者の判断において直接報復と置き換え攻撃との関係を知る手がかりとなったと考えらる。

本研究では、攻撃対象を独立変数として取りあげた。しかしこの中には、攻撃場面が大学内と電車内という側面も同時に存在し結果に影響を与えた可能性がある。言い換えれば公共性という側面である。大学内の仲間内での攻撃行動は公共性が低い場面、そして電車内での見知らぬ人への攻撃行動は公共性が高い場面で行われたと理解することが可能である。特に許容度の交互作用に関しては、直接報復か置き換え攻撃かという考え方ではなく、公共性の高低に置き換えても説明可能であると考えられる。これらの要因を明確に分離した検討が必要である。

なお、攻撃行動への共感の程度と許容度はともに高い値ではなかった。つまり、動機や攻撃の様態による差はあっても全体的水準は低く、攻撃行動に対する否定的な評価が基調にあることは明確である。

引用文献

- Crike, N. R., & Dodge, K. A. 1996 Social information processing mechanisms in reactive and proactive aggression. *Child Development*, 67, 993-1002.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley. (大橋正夫訳 1978, 対人関係の

心理学 誠信書房)

- Kelley, H. H. 1973 The process of causal attribution. *American Psychologist*, **28**, 107-128.
- Reeder, G. D., Kumar, S., Hesson-McInnis, M. S., & Trafimow, D. 2002 Inferences about the Morality of an Aggressor: The role of perceived motive. *Journal of Abnormal Psychology*, **83**, 789-803.
- Reeder, G. D., Kumar, S., Hesson-McInnis, M. S., Krohse, J. O., & Scialabba, E. A. 2001 Inferences about effort and ability. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 1225-1235.
- Ross, L. 1977 The intuitive psychologist and his shortcomings: Distortion process. *Advances in Experiment Social Psychology*, **13**, 279-301.